

紹介

葛原岩戸神楽

蒲江町 葛原岩戸神楽保存会

野口正人

(佐伯史談会 会員)

はしがき

世に、岩戸神楽といわれるものはたくさんあります。
県南地方だけでも、大野郡各地の御嶽流岩戸神楽、宇目
所重岡の岩戸神楽などがあり、お隣り九市尾の岩戸神楽
は日向系の特異なものであります。いずれも民俗芸能とし
て古い歴史を持ち、独得の姿を伝えていきます。

葛原浦の岩戸神楽は、大野郡地方を中心に県南に伝え
る、御嶽流岩戸神楽に属し、エツサ神楽と呼ばれ、その
特徴のある掛声とともに勇ましい舞振り風、古くから人
々に親しまれております。

とくにこの神楽の特色は、三間四面の大型舞台と使用
し、舞台への入退場には、歌舞伎の花道に相当する参道
によって行われます。

怒じて舞の抑揚動作が大きく、緩急が自在であり、莊
重優雅な舞から、軽快でコミックなまでの至るまで、変
化に富み、全体として又極めて勇壮であるということとて
ありましよう。

拍子は横笛からドラ型大太鼓・小太鼓・鉦と使用し、
神楽始めに打ち鳴らされるシヤカリの勇壮な音色のすば
らしは、聞く者に深い感動を与えずにはおきません。

神楽各番の解説は次に掲げますが、いずれも古事記の
物語から取材構成されており、随所に掛合言葉や神楽歌
などが入り、筋書が判り易く、比較的現代人の鑑賞に適
しているといわれております。

葛原のこの岩戸神楽は、材の鎮守天満神社春秋の大祭
に、二日間に亘って氏子が奉納するもので、一度史談会
の皆さんから三讀いたいただき、ご指導を仰ぎたいと思いま
す。祭礼奉納の日は次の通りです。

春 祭 毎年四月五日・六日(神幸祭でお旅所で)

秋 祭 十一月七日・八日(天満神社境内で)

岩戸神楽各番解説

一番 五(ご)方(かた)礼(れい)始(はじめ)

構成 五名(久々能知命外四神)

肇國のはじめ、天之御中主神この國の五方(東西南北
及び中央)を定めたとする故事にちなみ、五方の神々が
集まり給い、土地の不淨を払い清めて、幸あれと祈る舞
で、岩戸神楽の開式にもあたり、もつとも莊重優雅な神
樂であるとされていきます。舞のなかには、次のような神樂
歌がはいっております。

神樂にやうしてかけてたれがよに

神のやしると祝いそめけん

あるまじはきようとしるせば綾はえて

錦もはえてとくとふません

伊勢も神 熊野も神のおやなれ成

いせこそ神のはじめなりけり

二番 五穀(ごこく)は(は)ま(ま)き(ま)す(す)

構成 六名(須佐之男命、保食神外四神)

須佐之男命に食を求められた保食神が、自分の身体を各所から取り出して神に奉ったところ、汚いことをするというので斬り殺される。その遺体から五穀の種が生えたり、これを葬いて五穀豊饒を祝うという神楽です。

一三番 一平 國

構成 四名 (諸神)

天神達が国土建設のため、国内に荒ぶる國ツ神を、各地に平定する物語で、太刀は烈々たる武威を顕し、鈴は仁慈の姿を示している。初心者によって舞われるのを常とします。

一四番 一紫 曳 ぎ

構成 二名 (天兒屋根命・山雷神)

天の岩戸を開くために、天の岩戸の前に飾る、天、香具山にある神を、根こぎにする状の舞ですが、四方にある神の枝を觀衆に持たせて、これを力量感よくらしく曳くので、子供達に喜ばれる人気のある神楽です。

一五番 一布 晒 し

構成 二名 (天八千々命・水神)

天八千々根命が神衣を織り、よく洗ひよく濯ぐ状を、水神が道化役で現われ、命の真似をする。道化役は全くの初心者か飛入りで舞い、人々の興をよそえることが多いのも、この神樂の特徴です。

一六番 一降 臨

構成 七名 (天孫瓊杵命・天兒屋根命・太玉命・思兼命・天守賣命・菘田考命・天若日子)

天孫瓊々杵命が、弓の名手天若日子や、鼻天狗の菘田

考命と先導に、諸神を従えてこの國に降臨する状で、特殊な舞に人気があります。

一七番 一 天 降 遣

構成 六名 (三神・建御雷命・布津主命)

三神から国土奉還の使者を命せられた建御雷命、布津主命が、出雷の國は伊那佐の浜で大國主命に会見して、「國土の主は日の神の兒孫、天津彦根瓊瓊杵命、急ぎ渡し奉らんぬ」と申し入札をする。大國主命は急の使いに、驚いたり恐れたりして、仲々その返事をしづつていたが、劍をつきつけての強談判に、ついには「我が子、事代主命に神託うて、然うしてのち再び返り言を申さんと暫時の猶子とえうという筋で、大國主命がここではないわゆる、道化した「千ヤリ」な姿に表現されているところから、別名「千ヤリ神樂」とも呼ばれる。

一八番 一 貴 見 城

構成 八名

貴見城というのは、天上界にある王城のことであり、そこでは天人達が舞い踊って歌をつくすといわれています。ここでは天兒屋根命が、龍宮城を訪問したという物語を表わし、「衣裳見せ」の意味もかかっているといわれています。

一九番 一 神 逐

構成 五名 (須佐之男命・四神)

須佐之男命の所業が甚だ悪いので、藤原から根の國に逐われる。剛毅な須佐之男命は神々を相手に、互いに太刀と弓矢を持って攻め合うが、遂には力尽きて出雲の國へ落ちてゆく。一旦逐い落されながら再び引返し、弓

糸に鼻の脂をつけて戦うなど、「弓矢しらべ」の名場面がある。とくに四神（素面）は、神楽（素面神楽）舞の名手によって行なわれる勇壮な神楽です。

一十番 蛇ヒヤ切きり

構成四名（須佐之男命・足名槌・手名槌・斎稻田姫）

「神カミ返かへり」の続編にあたる大蛇退治の物語です。

神々に高天原を退かれた須佐之男命が、出雲の国出雲の川上を通りかかると、鏡カガミと短カサネ二人が、一人の乙女を中にして嘆き悲しむ状に出会います。

「汝キミたちは誰タレそや、なんぞかく泣くや」と問へば、

「やつが礼は国つ神なり。名は足名槌と申す。わが妻

の名は手名槌と申す。この乙女はやつが礼が子なり

名は斎稻田姫と申す。泣く故はさきに八人の乙女あり、

年毎に八岐の大蛇がために吞まれます。いままた

この乙女も吞まれますとす。逃にがるるによしなし、此

故ゆゑいたし申す。」

と答へ、その詠をきき、命は早速

「しからば娘を以て我にくれないや」と申し入ると、足名槌は喜んで「詠りのままに奉らんと承知する。そこで命は

「塩折りの酒を醸かみ合せ、さしき山をえじ酒を盛り盛

って待ちなば、果しておろち八百八谷の淵を渡り、

冬、酒船に頭下し入れ、酔よいて眠らん其の時に、

われ唄うたいたる十握とつかの劔つるぎを抜いてズタズタに退治し

と、一計を授けたのち、大蛇を退治する。

最後に須佐之男命の登声で、

「八雲立つ 出雲八重垣 つまごめめ」と歌い、足名槌・手名槌夫婦が、

「八重垣つくる その八重垣を」と下の句を和して、めでたく退場してゆく。

一十二番 綱ツナ切きり

構成一名

この神楽は綱を大蛇に見立て、須佐之男命の大蛇退治にならぬ、これを退治して、悪鬼悪魔を東・西・南・北・中央の五方に切鎮めるといふ神楽。非常に動きが速く、目まぐるしい舞で、老練な人によつて舞おれれます。

一十三番 岩戸イハド開ひら

構成十名（天照大神・天手力男命・天智受虎命・天智受虎命・天智受虎命・天智受虎命・天智受虎命・天智受虎命・天智受虎命・天智受虎命）

天照大神が天岩戸にお隠れになり、世は常闇トコヨミとなつたので、神々が協議をした上、思兼命に思わせて、天岩戸の前まへに集り、天智受虎命に舞わせ、常世トコヨの長鳴鶴トビを鳴かせ、傍らに布刀玉命が鏡を持って立ち、天照大神命が祝詞を奏する。

大神が不思議に思い、岩戸を少し割けてお覗きになるところを、力自慢の天手力男命が岩戸を押し開いて、大神を出し奉るといふ筋。

最後に、次の神楽歌がうたわれます。千早ふる神に御神楽なかりせば、天の岩戸は開かざりけり

本社を聞いてみれば、幣ハヒはかり、拜イハヒおこころに神ぞまします

- 樂器 横笛・大太鼓・小太鼓・鉦
- 装束 面・毛頭・水紋・烏帽子・袴・狩衣・小袖・手甲・野袴
- 採物 太刀・弓矢・矛・杖・鈴・幣・扇子・笏・鏡・宝・折敷・槍・布面
- 調子 三礼・本調子・シヤギリ

（外多座類以上）